

『吉岡の日記』を読む

―鹿野へのお出かけに注目して―

【指導教員】

岸本 覚

久保 堅一

【学 生】

網川 なつみ

裏戸 槇子

岡森 星歌

中川 真麻

仁藤 妃翔里

山岡 稜司

一、はじめに

私たち「『吉岡の日記』を読む」グループは、鷺見休明著『吉岡の日記』（鳥取県立図書館蔵）の翻刻や、実際に姫君たちが通ったとされる場所の現地調査、『吉岡の日記』に登場する人物や場所についての文献調査などを行った。この活動の目的は、資料の翻刻をし直し、内容を正確に捉えることである。また、主に姫君たちが鹿野へ出かけたことに注目し、なぜ鹿野へ行ったのかを明らかにすることも目的とした。そのために、姫君たちが鹿野までの道のりでどのような体験をし、どのような景色を見たのかを調査した。

二、歌で読み解く鹿野道中―歌の景色から考える姫君たちの行動―

『吉岡の日記』の中には多くの歌が登場する。この章では、鹿野へ向かう道のりで景色について詠まれた歌を読み解くことで、なぜ姫君たちがその場所を訪れたのかということについて考察する。

まず、瀬田倉での歌に関することを述べる。瀬田倉での歌が詠まれた厳密な所在についての情報がなかったため、現在使われているバス停の「瀬田蔵」と「瀬田蔵口」付近で調査を行った。

瀬田倉村（上瀬田倉 景平）

戸数十四 氏神瀬田倉大明神（祭九月廿八日）末社荒神。

八幡宮神 長柄村の奥五町許西山際にあり、是を下瀬田倉と云ふ

本村也、上瀬田倉は奥にあり、景平と云ふ支村あり、此の村は鹿野への本道にて吉岡湯村より十二町五十間其間に瀬田倉あり、歩渡りなり、妙徳寺村は其間十町なり

（『因幡志』より抜粋）

この『因幡志』の記述から、神社を中心としていくつか集落が存在し、瀬田倉は吉岡温泉から鹿野への道のりの道中にあることが分かる。では、瀬田倉で詠まれた歌を読み解いていく。

よべはなほ 風さむかりし ことわりを 道の行手の 霜に見すらん

（昨夜はやはり風が寒かった道理を、道の行く先の霜が示しているのだろう。）

朝まだき わくる山路は さえく／＼て 置霜しろき みちしばの草

（朝早くも押し分けて進む山路は澄みきって、降りた霜が白い道端の芝草であるよ。）

これらの歌から、鷺見は瀬田倉の景色について着目していたと考えられる。歌の後で鷺見は、瀬田倉の紅葉とそれよりも美しい姫君の御傘についての素晴らしさ、そして永遠を表す松の様子について言及している。そのことを踏まえると、残っている霜の「白」、紅葉とそれに勝る姫君の御傘の「紅」、そして姫君たちの永遠を表す松の「緑」の色のコントラストの美しさを表現していると言える。姫君に風光明媚な景色を楽しませるため、瀬田倉を訪れたのではないかと考える。

次に、つぶて岩での歌に関することを述べる。つぶて岩で詠まれた歌は以下のようなものである。

もろ／＼の 峯より高く しら雪の 積るにそれと しるき大山

（多くの峯より高く、白雪が積もっている様子でそれだとはつきり分かる大山よ。）

調査の中で、実際につぶて岩に登ることは叶わなかったが、付近の山の道中で山々の間から日本海が見下ろされることを確認した。このことから、本物のつぶて岩からの景色も同様に大海などが見下ろされるであろうと考える。また、実際のつぶて岩へ登るのにはかなり危険が伴われるため、姫君が実際につぶて岩に登ったというよりは、御供が登って見た景色を伝えたという可能性が高い。しかしながら、この行為は注目に値すると考える。この行動は「国見儀礼」という天皇や地方の長が高いつぶて岩に登って、国の地勢、景色や人民の生活状態を望み見ることであり、国を支配する者の支配の象徴的行為を連想させる。よって姫君が行った「高い位置から自分の治める領地を見下ろす」ことは、一種の国見儀礼に値するものであり、領主の一族としてつぶて岩を訪れ、治める土地を眺めたのではないかと考える。

最後に、鷺峯山での歌に関することを述べる。歌で詠まれた鷺峯山の景色(図一)と実際に撮影した鷺峯山の写真(図二)を比較する。歌で詠まれた鷺峯山の様子は「無駄安留記」より引用した。景色に若干の脚色が見られる。実際の写真の鷺峯山は、雄大に広がりつつも付近の山々との大きさの違いはそれほど顕著ではない。一方で、絵の鷺峯山は、鷺峯山本体に視点を集中させて描かれている。そのため、本物の鷺峯山の大きさが誇張して描かれており、威厳のある様子が感じられる。

図一 「無駄安留記」の鷺峯山



図二 実際の鷺峯山



さらに、鷺峯山には鳥取県で最も標高が高い山として知られる大山とどちらが高いのか比べたという伝説「鷺峯山と大山の背比べ」が残っている。

全国の神様たちが出雲での行事が終わった帰り道、鷺峰山と大山の神様が互いに自分の方が背が高いと言い争いになり、背を比べ合った。その結果、鷺峰山が勝利したが、悔しかった大山の神様は、鷺峰山の神が眠っている間に杓子で頭をすくいとった。

追いかけてくる鷺峰山の神様に驚き慌てて逃げようとした途端、杓子に付いていた土が落ち、鳥取市青谷町の建山へと変わった。鷺峰山の神が「土はもうな

いのか」と怒鳴ると、大山の神は袖を振って見せた。すると、土がどさっと落ち北条町の袖振山になったそうだ。

(民話・神話 鷺峯山と大山の背比べ、二〇二〇)

この伝説からも分かるように、鹿野の人たちにとって鷺峯山は、鳥取県で有名な大山よりも価値が高い神聖化された存在だったのではないかと考える。そして、鷺見もそれを理解していた上で歌を詠んだと察せられる。

鷺の峯 鹿野の園と みほとけの 国にある名を いかでよぶらん

〔鷺の峯〕や〔鹿野の園〕と、どうして御仏の国(天竺)にある尊い地の名を付けて呼んでいるのだろうか。不思議でありがたいことだなあ。)

と詠まれているように、仏教で登場する土地にも関連していることにも触れている。これらのことを踏まえ、鷺峯山は歌に詠まれるほどの信仰がある東の特別な山であると認識していたからこそ、鷺峯山についての歌を詠んだのだと考える。

三、破れ堂について

『吉岡の日記』本文では、破れ堂について、「やぶれ堂といふところにて、やすみ給ふ。むかし破たる堂ありしと、いひならはしけるが、今は石地藏のみ立り。」とあり、鹿野までの道のりの休憩地点として登場する。この章では、姫君たちが休憩地点として立ち寄った破れ堂についての調査で分かったことを述べる。

『因幡志』では、破れ堂について、「村の奥洞谷河内と鹿奴道と追分の山裾にあり、今は堂宇もなし、平地に古き椎の木の下に五輪四基あり、昔此處に堂宇あり、後代修補の施主なし、故に破れ堂と云ふと云えり、五輪も故ある古墳とみゆ、又古城趾あり」と述べられている。また、一九九一年に発表された『鳥取県歴史の道調査報告書』では、「破れ堂は、近年、元の位置の上の山腹に復元されている。」と記されている。

実際に破れ堂を訪れてみると、建物と五輪塔があった(図一)。立てられていた木の柱には

・〔正面〕尾木原城遠由之地



図一 建物の様子

・〔右〕 鎌倉時代 建久七年築城
 桃山時代 天正九年落城 三八五年間在城
 ・〔背面〕 平成十二年 鳥取市洞谷区長
 二〇〇〇年 河原町長瀬 萩原氏 建之
 ・〔左〕 室町時代 宝篋印塔 五輪塔 奥都城（墓所）在り
 河内洞谷に菩提寺観音堂在り
 と記されていた。（図二～図五）。



図三 木の柱右面



図二 木の柱正面

図四 木の柱左面



図五 木の柱背面



これらのことから、破れ堂は尾木原城の跡地であることが分かった。『因幡志』の記事を踏まえると、元々この場所には五輪塔のみがあり、二〇〇〇年に建物が建

てられ、現在の形になったと推測される。図一の建物には「萩原氏神霊舎」と書かれた木の板があり、萩原氏という一族を祀っていることが分かった。尾木原城についてはいくつか伝承が見られた。しかし、それを裏付ける文献や「尾木原氏」、「萩原氏」に関する信頼できる情報を見つけることはできなかった。また、『鳥取県歴史の道調査報告書』は一九九一年に発表されているため、「元の位置の上の山腹に復元されている」建物とは別のものであると言える。また、図七のように舎には家紋が入っており、五三桐か五七桐のどちらかであると推測される(図六)。

図六 五三桐と五七桐



五三桐



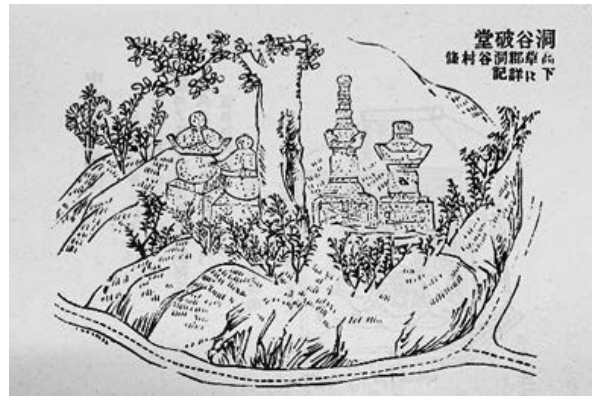
五七桐

図七 舎の家紋



『因幡志』(図八)や『吉岡の日記』に記されていたように、破れ堂には五輪塔があった(図九)。形も絵図と酷似しており、同じものであることが分かる。しかしその並び順は異なり、「古い椎の木」に該当するような木も見当たらなかった。また、『因幡志』には「五輪四基あり」と記載されているが、現地の木の柱に記されていたように、実際には五輪塔と宝篋印塔があるということが分かる。

図八 『因幡志』(因伯叢書)三



図九 五輪塔の様子



四、洞谷峠について

『吉岡の日記』廿一日の記述に、「洞谷峠にいたる。此所に御輿台まうけてあれば、すこしの間、休み給ふ。鹿野はましたに見おろさる。」とあり、洞谷峠は姫君たちがお休みになった場所であるということがわかる。この章では、洞谷峠について調査した結果を述べることにする。

洞谷村について『因幡志』には「洞谷坂に半腹西側にあり、瀬田蔵より良の奥へ廿三町二十間なり、此山は氣田高草兩郡の堺にて吉岡より鹿奴への本道なり、洞谷より嶺まで九町也、村より下は坂道緩く吉岡迄凡そ三十町次第に下るなり、氣田の方は急峻にして頂より麓まで九町許也、小河内と云支村あり、村の上より左へ入る小谷の詰りなり、洞谷河内と云ふ是なり、洞谷と號するは日本紀にも出たる地名にて上古より紛亂なき名所なり、歴世考に詳也」という記述がある。洞谷村から洞谷峠までは九町(約〇・九キロメートル)であり、吉岡までは三十町(約三キロメートル)の急峻な坂道を下るということがわかる。このことから鹿野への道は険しいものであったと考えられる。『吉岡の日記』には「鹿野が真下に見下さる」という記述があり、『鳥取県歴史の道調査報告書第九集 法美往来 鹿野往来』では、「峠上から眺めた景色は、東側を眺めると、日本海の青さを眼下に見ることができ、西側を眺めると、鹿野の街が目前に見える。」と書かれている。私たちが現地調査に行ったときは木に遮られて鹿野の街を見下ろすことはできなかったが、かなり急な坂道であるため、当時は鹿野の街を見下ろすことができたろうと推測される。また、峠を下っているときには日本海を少し見ることができたが、私たちは車内から見たため、姫君たちが見ることができたかはわからない。また、姫君たちは洞谷峠に到着した際御輿台を置いて休み、その後峠を下り「草屋」というところで昼食を食べた。このように行きの道ではしっかりと休憩をとっているということがわかる。一方、帰りの道は、「日もや、かたふきて、申の時過ぬめりといへば、道いそがせて、洞谷峠にも休給はず。」という記述があり、日が暮れてしまったため、休憩を取らずに急いで帰ったということがわかる。

図一の石碑は洞谷峠の上にある石碑で、旅の安全を祈願するものである。寛政三年(一七九一)という文字が刻まれており、姫君たちが通ったのは文化元年(一八〇四)であるため、姫君たちが通る約十三年前に建てられたものであることがわかる。そのため姫君たちも見たと考えられる。左側には「セワ人ミクマヤ」と書かれ

ている。「世話人御熊屋」と考えられるが、詳しいことは今後の課題である。

図一 洞谷峠の上にある石碑



図二の地蔵は図一の石碑と同じ場所にあり、これも旅の安全を祈願するものである。この地蔵には嘉永七年（一八五四）という文字が刻まれているため、姫君が通る約五十年後に建てられたものであることがわかる。また、中心には「利生無邊」と刻まれている。利生は仏語で仏菩薩が衆生を救うこと、またその恵みを意味する。無邊は限りのないこと、広々として果てしないことを意味する。左側には法楽寺村、根取などと刻まれている。根取とは江戸時代、年貢収納の標準に用いた一反当たりの基準取り米で、田畑に上・中・下・下下などの等級をつけ、それぞれ年貢として納める取り米いくらと定めたものである。

図二 洞谷峠の上にある地蔵



また、破れ堂付近には図三の地蔵が建てられているが、年号などの文字は刻まれておらず、『鳥取県歴史の道調査報告書第九集 法美往来 鹿野往来』には、旅の安全を祈願したものか、あるいは破れ堂に関連したものかはっきりしないと書かれている。地蔵が道端に置かれている理由には諸説あるが、道の角に立っている場合、道の角は集落と集落の境界となることが多く、外から悪いことが入ってこないよう境界の目的で建てられているという説がある。この地蔵は洞谷の内の本洞谷集落と河内洞谷集落への分岐点に安置されていると『鳥取県歴史の道調査報告書』に書かれているため、結果として建てられているのではないかと考えられる。また、『地蔵菩薩本願経』では地蔵菩薩には二十八種利益と七種利益があるとされており、古くから地蔵の力が信じられてきたということがわかる。

図三 道端にある地藏



五、幸盛寺について

『吉岡の日記』の中にはいくつかの寺の名前が登場するが、吉岡から鹿野へ向かう道中の場面で、幸盛寺という寺が登場する。この章では、幸盛寺について歴史やゆかりのある人物など様々な視点から探り、分かったことを述べる。

幸盛寺の様子を図一に示す。鳥取市気多郡鹿野町鹿野にある浄土宗の寺で、『吉岡の日記』の中では、上巻廿一日の鹿野へ向かう道中の場面で「常徳寺・幸盛寺などを、右に見つゝ、たはこ橋をわたり」という形で登場する。境内には戦国時代に活躍した山中鹿之助の墓と伝える無縫塔があることで有名である。山号は鹿野山（ろくやさん）、院号は精林院で本尊は阿弥陀如来である。（『鳥取地名誌』より）

図一 幸盛寺の外観



ここからは幸盛寺に関して、歴史、寺の中の様子、幸盛寺とゆかりのある山中鹿之助、亀井茲矩という人物と山中鹿之助の関わり、の四つに分けて説明する。

〔歴史〕

寺伝によると、元々は明照山持西寺と号し宝徳年間（一四四九～五二年）に慧鏡房が開基した寺で、持西山の北東の麓にあったとされている。その後鹿野城城主となった亀井茲矩が、義理の父にあたる山中鹿之助幸盛の菩提を弔うために、現在の場所に持西寺を移転した。その際に山中鹿之助幸盛の名から二文字ずつ取って山号・鹿野山、持西寺から幸盛寺へと改称した（慶長六年、一六〇一年）。また、明治六年（一八七三）には本堂を西志加奴学校（鹿野小学校）に提供し、ここで鹿野の小学校教育が始められた。昭和十八年（一九四三）鳥取大地震によって本堂が倒壊したが、昭和二十三年（一九四八）再建し、昭和四十七年（一九七二）に客殿も増築された。（『鹿野町誌』上巻より）

〔寺の中の様子〕

本尊仏は護持仏阿弥陀如来で、有名な仏師運慶と湛慶が左右半分ずつ作った説がある。この護持仏阿弥陀如来は元々、生家湯氏が以前まつていたもので味野村の願行寺（鳥取市）にあったのを、茲矩が譲り受けた。境内には幸盛の墓の他に、観音堂があり三十三体の観音菩薩がまつられている。他にも境内には大イチョウの木（図二）がある。この大イチョウの木は、城下町鹿野の中心に位置し、樹齢四〇〇年以上とも言われている。

図二 大イチョウ



また、当寺旧蔵の明応六年（一四九八）五月三日銘の梵鐘は丈三尺・差渡し二尺で、銘文によると高草郡布施（現鳥取市）の「仙林寺」で鑄造されたもので、茲矩が湖山池から海までの水路を開削中に掘出されたものと伝える。（『鹿野町誌』上巻、『鳥取地名誌』から）

〔幸盛寺とゆかりのある山中鹿之助〕

本名は山中鹿之助幸盛といい、出雲国（現島根県東部）の尼子氏に仕えた室町後期の武将で尼子十勇士の一人である。その忠誠心の高さが有名であり、何度戦いに敗れても主君の再建のために尽くした人物としても広く知られている。以下、彼の武勇伝をいくつか紹介する。

- ・一騎打ちを得意とし、勝利することによって負け戦の中で自軍の士気を上げる。
- ・毛利氏との戦いで捕らえられ幽閉されるが、自分の尻を切って赤痢に罹った振りをすることでトイレから逃げ出す。

また、彼が主君の尼子氏が弱体化していく中で「願わくば、我に七難八苦を与えたまえ」（図三）と語り、どんな困難があっても主君の復権を誓った話も有名である。戦国時代の武将として知名度を誇る織田信長、豊臣秀吉などもその忠誠心を認める。

図三 幸盛寺に建てられた石碑



〔亀井茲矩と山中鹿之助〕

山中鹿之助と亀井茲矩との関係は、切っても切れない関係にある。茲矩は幼少期に亀井家を継ぐことになったが、その前は幸盛が継承していた。しかし幸盛の兄が病弱で、幸盛が本来の山中家を継ぐことになったため、亀井家当主の座を幼くして茲矩が継ぐこととなる。それから交流が続き、茲矩が鹿之助の娘（養女）をめとする程両者の結びつきは強いものである。また鹿之助が捕まり殺されると、茲矩がその供養のため幸盛寺に墓を建て、それが「幸盛寺」の由来となる。このように、亀井茲矩は「幸盛寺」名付け親にあたる。

六、吉岡将監について

『吉岡の日記』上巻廿八日の日記には「大つか山のもとに、簾さしの森、尾上に吉岡将監の、しるしの石ありとぞきく。」という記述がある。「しるしの石」とは「吉岡将監の墓」（『因幡志』）と考えられるが、「しるしの石」とわざわざ記される吉岡将監という人物は何者なのか調査した。この章では、その調査によって分かったことを述べる。

吉岡将監（定勝）は吉岡安芸守（あきのかみ）とも呼ばれ、高草郡吉岡荘（現在の鳥取市吉岡温泉町）を本拠地とする生没年不詳の国人である。最も有名な活躍として、因幡吉岡表の戦いにて羽柴（豊臣）秀吉に三度も勝利したという話がある。

戦国時代末期、織田信長は西国へと勢力を広げていく過程で中国地方を治める毛利氏と争っていた。一五八〇年、織田の軍勢である豊臣秀吉は、因幡への攻撃を開始する。これは、織田軍が西国へ進出する前に毛利軍勢に奪回されていた鳥取城を奪い返したいという秀吉のもくろみがあった。そして鳥取城包囲網を完成させた秀吉は、いよいよ因幡毛利勢への本格的な攻撃を開始する。その攻撃対象の一人が亀山城（防己尾城）の吉岡将監であった。七月十九日、秀吉軍の最初の攻撃が行われた。吉岡軍は五〇人余りを討ち果たしこれに勝利する。同月二十七日に行われた二度目の攻撃にも勝利している。九月七日に秀吉軍は三度目の攻撃を仕掛けるが、これにも秀吉軍の主だった者三〇人余りを討ち果たす勝利を飾っている。

この三度目の戦いについて記述が残っている。

一 吉岡安藝ハ藝州馳走之仁也、鳥取ヨリ西中間五十三里有之歟、彼城湖へ差出、尾頸計地續也、筑前守殿夜中ニ表御出馬、有尾頸之手死（*）、人数被遣、自身ハ城之尾崎際へ舟ヲ寄、湖へ可被追崩行ニ候處ニ、城内ヨリ尾崎之勢突崩、湖へ追付ル敵船踏返シ、數百人死人有之、筑前守殿馬符迄被捨置、危ク御退之事、

（*）原文は、なべぶたにタヒ 「山県長茂覚書」より（出典『石見吉川家文書』）

要約すると、「秀吉軍數百人が討ち死にし、秀吉は馬符（馬印）まで捨て置くありさまで、危機一髪退却した」と記されている。

鳥取城陥落の後の吉岡氏の動向は明らかではないが、十一月に吉岡へ秀吉軍の多

賀備中守が派遣されていることから、落城と同時に吉川氏を頼り西へむかったと考えられている。

七、讓伝寺と亀井茲矩について―姫君が鹿野へ向かった理由を探る―

『吉岡の日記』上巻廿一日の日記の中に、讓伝寺に関する次のような記述がある。

(本文)

讓伝寺にまうでたまふ。此寺は、もと亀井殿此所領し給ひし時の、菩提寺にて、寄附し置れし、古きもの、数々とり出て、見せ奉る、唐織の旗、おなじ陣羽織にてありしものは、中にもめづらし。夫より城の跡のかた、見めぐり給ふて、もとおはせし道を、吉岡へ帰り給ふ。

(現代語訳)

(姫様方は)讓伝寺に参詣なさる。この寺は亀井殿が治めなさった時の菩提寺であり、(亀井殿が)寄附されていた古いものを色々取り出して(姫様方)にお見せ申し上げる。その中でも唐織の旗とそれと同じ陣羽織は珍しいものであった。それから城の跡を見回りなされて、いらした元の道に戻り、吉岡にお戻りになられる。

現代語訳を読んでわかるように、姫君は讓伝寺に参詣した際に、亀井茲矩が寄付した織物を見たり城の跡を見て回ったりして時間を過ごされた。讓伝寺にあった織物は当時珍しいとされるものであったこと、姫君は讓伝寺を出た後にすぐに吉岡へお戻りになったことから、おそらく姫君は珍しいとされる讓伝寺の織物をご覧になるためにわざわざ鹿野へ向かったのではないかと推測した。この章では、讓伝寺と亀井茲矩に関する調査で分かったことを述べ、最後に姫君が鹿野へ向かった理由を再考する。

まず、『吉岡の日記』の本文にも登場する亀井茲矩という人物と讓伝寺の歴史について述べる。以下は、『日本歴史地名大系第三十二巻 鳥取県の地名』、『戦国の知将 亀井茲矩 その足跡と遺産』を参考にして進めた調査の結果である。亀井は

鳥取城を落した羽柴秀吉によって鹿野城に封ぜられ、妙見山麓に城下町を建設した。三度にわたって幕府から朱印状をもらい、東南アジアの国々に貿易船を派遣するという功績を残した人物である。また、讓伝寺は、徳雲寺の開山である覚隠永本の弟子・南寿慎終によって、当時廢寺となっていた寺を再興するかたちで開かれた。元は小別所村にあった寺を鷺峰村に移し、法城寺とされていた寺の名前も抱月寺と改められた。天正十一年に鹿野城主となった亀井も帰依、寺領を寄せ、現在も本堂には亀井の位牌が安置されている。

次に、讓伝寺の寺宝である織物について述べる。讓伝寺の寺宝として保管される織物は、花禽獸文刺繍(朝鮮王陣旗)、孔雀文刺繍(朝鮮王陣羽織)、□竜文織物(朝鮮王敷物)の三点である。『日本歴史地名大系第三十二巻 鳥取県の地名』によると、これらはいずれも染織物であり、亀井が朱印船貿易によって得たもの、朝鮮出兵のときに持ち帰ったもの、などと伝えられている。以下は、それぞれの織物について、『少林山誌』を参考にしてまとめた結果である。

○花禽獸文刺繍織物(朝鮮王陣旗)(図一)

- ・縦二メートル、横一メートルほどの大きさである。
- ・経糸は細い麻糸、緯糸は羊毛の軟らかい太い糸を用いて模様を浮き出させている。
- ・一本の樹木を中央に配置し、右側には黒豹、左側には獅子が歩いている様子が表現されている。
- ・中央部には対になった極楽鳥が向かい合って飛んでいて、左右のバランスがとれた図案となっている。
- ・天正・慶長年代では日本の織維品は麻が中心の原料であったため、このような毛織物は貴重なものであったと考えられる。

図一 花禽獸文刺繍織物



出典 『海と生きる〜海から見た江戸時代の鳥取〜』

○孔雀文刺繍織物（朝鮮王陣羽織）（図二）

- ・縦約〇・九メートル、横約一・一メートルほどの大きさである。
- ・経糸・緯糸ともに極細の綿糸を使用した木綿生地が用いられている。
- ・亀井が譲伝寺に寄進した当時はもっと大きな織物であったが、ある僧が「打鋪」に変裁したことで小型の布切れになったと言われている。
- ・どのような染織技術や染料を用いたのかは判明していない。
- ・戦国時代には山陰道地域で綿の栽培は行われていなかったため、木綿布は貴重なものであった。

図二 孔雀文刺繍織物



出典 『海と生きる〜海から見た江戸時代の鳥取〜』

○□竜文織物（朝鮮王敷物）（図三）

- ・縦約一・八メートル、横約一メートルほどの大きさである。
- ・極細の毛糸の経糸を使用し、緯糸は太目の毛糸を用いて織られた布である。
- ・四隅に竜門、中央に対になった□竜が配置されている。
- ・どの方向から眺めても対照的に描かれた図案となっている。
- ・他の二点と同じく、南洋諸島で製作されたものと思われる。

※□は、他の文献等には「爬」とあるが、登録は「巴」ではなく「虫」となっている。文字がないため本稿では□で表記した。

図三 飛竜文織物



出典 『海と生きるー海から見た江戸時代の鳥取ー』

では、姫君が鹿野へ向かった理由を再考してみる。織物についての調査から、原料の観点から見て珍しいものであるということはわかった。それに加え、珍しい織物が江戸に行かずとも鳥取で見られるということに対する好奇心、当時の鎖国政策下における異国情緒への憧れ、美しい織物に対する女性の好みなどがあったという理由から、姫君は鹿野へ向かわれたと考える。

八、おわりに

最後に、私たちが『吉岡の日記』に関する調査を進めてきた上でのまとめを報告する。和歌、伝説、景色、姫君が通った道のりや訪れた場所、ゆかりのある人物など、様々な視点から調査を進めたことで、より深く『吉岡の日記』を読み解くことができた。現地調査では、実際に姫君が通ったとされる場所を辿り、日記が書かれた当時と現在を比較して、共通点や相違点を見いだすことなどができた。

「姫君たちはなぜ鹿野へ行ったのかを明らかにする」という共通のテーマを持ちながらそれぞれ調査を進め、姫君が鹿野へ行った主な理由は譲伝寺にある珍しい織物をご覧になるためだという結論に至った。だがそれだけではなく、鹿野へ向かう道中でも様々な景色を楽しまれたり所々お休みになられたり、好奇心旺盛だとさ

れる姫君にとってはどこかへ出向くということ自体が楽しみであったということがうかがえた。

【参考文献】

- ・『樗谿叢書第一集 姫君姉妹吉岡温泉滞在日記』（鳥取市歴史博物館、二〇〇四年）
- ・『因幡志』（佐伯元吉編『因伯叢書』三、名著出版、一九七二年）
- ・鳥取地誌研究会『稲葉佳景 無駄安留記 影印編』（鳥取大学地域学部、二〇〇六年）
- ・岩波 仏教辞典 第二版（中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木文美士、岩波書店、二〇〇二年）
- ・鳥取県公式サイト「民話・神話 鷲峯山と大山の背比べ」
(<https://www.pref.tottori.lg.jp/item/26130.htm>, 2021/1/28閲覧)
- ・『鳥取県歴史の道調査報告書』（鳥取県教育委員会文化課編、鳥取県教育委員会、1991）
- ・『五輪塔』、世界大百科事典、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com/>（参照2020-11-06）
- ・五輪塔の例「百科マルチメディア」「日本大百科全書（ニッポニカ）」—JK2014 (japanknowledge.com)（参照2020-12-15）
- ・『ほうきょういんとう』『宝篋印塔』、デジタル大辞泉、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com/>（参照2020-12-04）
- ・宝篋印塔の各部名称「百科マルチメディア」「日本大百科全書（ニッポニカ）」—JK2014 (japanknowledge.com)（参照2020-12-16）
- ・紋章1「図版」「国史大辞典」—JK2014 (japanknowledge.com)
- ・『ねーとり 根取』、日本国語大辞典、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com/>（参照2020-11-27）
- ・『むーへん 無辺』、日本国語大辞典、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com/>（参照2020-11-27）
- ・『りーしょう・シヤウ 利生』、日本国語大辞典、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com/>（参照2020-11-27）
- ・『鳥取歴史の道調査報告書第九集 法美往来 鹿野往来』（鳥取県教育委員会、一九九一年）
- ・『地藏菩薩本願経』（<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/922972>）
- ・中本葬祭 (<https://nakamoto.jp/>)

- ・『鳥取市誌』（鳥取市編、鳥取県出版、一九七二年）
- ・『鹿野町誌』（鹿野町（鳥取県）、鹿野町出版、一九九二～一九九五年）
- ・小説 山中鹿之助…英雄につぼん』（池波正太郎、集英社文庫、二〇〇二年）
- ・『亀井琉球守』（岩井三四二、角川文庫、二〇一〇年）
- ・『鳥取県史ブックレット1 織田と毛利―鳥取をめぐる攻防』（岡本吉彦、鳥取県、二〇〇七年）
- ・『日本歴史地名大系第三十二巻 鳥取県の地名』（平凡社、一九九二年）
- ・『少林山誌』（少林山譲伝寺、一九八九年）
- ・『戦国の知将 亀井茲矩 その足跡と遺産』（鳥取市西部地域文化活用実行委員会、二〇一二年）
- ・『海と生きる―海から見た江戸時代の鳥取―』（鳥取県立博物館、二〇一〇年）